

【賤ヶ岳と余呉湖】

賤ヶ岳へは琴の糸を作っていた大音（おと）の側からリフトに乗っていくこともできるが、反対側のひっそりと静まり返る余呉湖側から歩いて登ることもできる。賤ヶ岳は信長亡き後、秀吉と勝家が覇権を争った場である。山頂からは奥琵琶湖と余呉湖のみえる佳景が広がる。だがそれ以上に秀逸なのは全国に数ある像のなかでこの賤ヶ岳山頂の疲れ果てた武士像である。戦い終わった武士が槍に寄りかかり、ぐったりとしている。もはや戦い疲れて戦功の褒美がどのくらいなのかさえ朦朧として考えられないといった姿態である。重い具足をつけて足半（あしなか）で山野を駆けめぐる戦国の世に生きることなどとてもできないことだとこの像を見るたびに思う。山を下って湖畔を歩くと乞食俳人・路通の句碑があり、冬の夕べであったがオオバンやキンクロハジロやオナガガモの浮寝姿がみえた。路通が詠んだ「鳥共も寝入りにあるか余呉の海」の冬景色は数百年経っても変わらない。路通の句に「細み」ありという評価と疲れ果てた武士像に共通しているのは、生への共感ということではないのか。